

## イメージの終焉？

—— 1930年の欄外注草稿を読む<sup>1</sup> ——

今 井 勉

フランス第三共和政期を代表する詩人思想家ポール・ヴァレリー（1871-1945）のデビュー評論「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」（以下「序説」）の初出は1895年、詩人24歳の時である。19世紀末の時点でヴァレリーは、1890年から1892年にかけていくつかのマイナーな文芸誌に韻文詩を寄稿した象徴主義詩人として、また「序説」と1896年の抽象的短篇小説「テスト氏との一夜」、そして1897年の文明評論「ドイツの制覇」の著者として、ごく一部の読者に知られる存在ではあったが、その後およそ二十一年間にわたって一般には知られないままほとんど無名の時代を送った。ヴァレリーがフランスのみならずヨーロッパで、さらには各国語への翻訳を通して世界的に有名になるのは1917年、46歳の時に発表した長詩「若きパルク」以降のことである。以後1945年に没するまで、詩人はアカデミー・フランセーズ会員、コレージュ・ド・フランス教授として栄光の道を歩む。無名時代の作品の再版が進んだのはヴァレリーが有名になってからである。「序説」についていえば、1919年に第二版、1931年に第三版が、それぞれ、その後に書かれたテキストを加えた増補版として出版されている。

### 二度の加筆

1919年の「序説」再版に当たってヴァレリーは、ほぼ四半世紀前に『新評論』誌上に発表した旧作の本文にかなりの手を加えている。ジャン・イチエはプレイヤード版の「序説」後注で次のように記している。「『新評論』の異文は予想以上に多い。ヴァレリーは内容を変えずに、多くの箇所文体を修正したり句読点を改めたりしただけでなく、

<sup>1</sup> 本稿は、2012年12月8日に東北大学で開催されたシンポジウム「無名時代：表現の獲得と揺らぎ」における筆者の口頭発表「イメージの終焉？—1930年の欄外注草稿を読む—」を基にしている。同シンポジウムを企画され、発表の機会を与えてくださった東北大学大学院文学研究科の阿部宏教授にこの場を借りてあつく感謝申し上げる。

いくつかの点で考えを改めたり削除を施したりしている。これらの修正のほとんどは1919年版でなされたものである<sup>2</sup>。さらに1930年、「序説」, 「注記と余談」, 「レオナルドと哲学者たち」のいわゆるレオナルド論三部作を一冊の書物にまとめる際にヴァレリーはこれら三篇の全体に欄外注を施す。この書物の刊行は1931年であるが、欄外注の執筆は1930年に行われたものであり、本稿では「1930年の欄外注」と呼ぶことにする。欄外注も広義の加筆の一種とみなせば、無名時代の若書きである「序説」は有名時代のヴァレリーの手によって二度の加筆を経験したことになる。

加筆の詳細を全体にわたって観察するには大規模なテキスト・クリティックの作業が必要になるが、本稿では言わば定点観測として「序説」テキストのある部分に着目し、それが二度にわたる加筆においてどのような変化の道筋をたどったかという点について考察してみたい。注目する部分は、1895年のヴァレリーがレオナルド・ダ・ヴィンチに並ぶ精神として高く評価していた英国の物理学者ケルヴィン卿（サー・ウィリアム・トムソン）について記したくだりである。

広く知られているように、ヴァレリーは、想像力のあり方、物の見方、推論の仕方といった点で、科学的な世界観、とりわけ物理学的な世界観に、ひとりの詩人思想家として生涯にわたって強い関心を示し続けた<sup>3</sup>。ヴァレリーと交流のあったノーベル賞物理学者ルイ・ド・ブロイはCNRS版『カイエ』の序文で次のように記している。

ポール・ヴァレリーは科学を好んでいた。彼は科学を長きにわたって研究し、その発展と進歩を見守り、自らの談話や文章の中で科学の諸概念と言語を用いることを好んでいた。[……] 迅速かつ正確な想像力によって彼は、自らの思考を、科学者の言語から引いて来た用語——その正確さを彼は愛していたし、彼の繊細な直観はその抽象的な価値と具体的な意味とを最初から把握していた——の助けを得て表現するに至ったのである<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> Paul Valéry, *Œuvres I*, édition établie et annotée par Jean Hytier, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1957, p. 1821. 以下「*Œ*, I, 1821」のように略記する。

<sup>3</sup> 現代の一線の科学者たちがヴァレリーの科学的思考を論じた研究書があり、その日本語訳も刊行されている。*Fonctions de l'esprit, 13 savants redécouvrent Paul Valéry, textes recueillis et présentés par Judith Robinson-Valéry*, Hermann, 1983 ; 『科学者たちのポール・ヴァレリー』, 菅野昭正, 恒川邦夫, 松田浩則, 塚本昌則訳, 紀伊国屋書店, 1996年。

<sup>4</sup> Paul Valéry, *Cahiers*, t. I, préface, CNRS, 1957. (Édition en fac-similé, 29 volumes, 1957-1961.) 以下「*C*, I, 頁数」のように略記する。

特に物理学との関わりを語ったヴァレリー自身の言葉をここに引いておこう。

私があまりにも物理学的なアナロジーを使い過ぎると人が見なすとしたら、私はこう答える。私は科学に特に物の見方と推論の仕方を借りているのだ、と。こういう手立てにはなんら特別《物理学的》なものはない。もし、サイクルによる推論様式をカルノーに示唆したものが何だったかを探求すれば、そこに見出されるものは私の対象に適用されうるものばかりだろう。(C, VIII, 106 / C, 2, 848<sup>5</sup>)

ヴァレリー自身、しばしば記しているように、19世紀から20世紀にかけて、物理学的な世界観は大きな転回を示した。たとえば、1931年の「カイエ」には次のような興味深い断章がある<sup>6</sup>。

人類の歴史

第一、〈固体〉——および連続体の時代。

第二、波動および放射線の時代——中継装置。

最初の時代——第一、L——幾何学

第二、L, T——古代天文学

第三、L, M, T——ケプラー、ニュートン、力学、〈質量〉の神秘

ここで——推移——F,  $\theta$ , Q, S——エネルギー、カルノー、エントロピー、熱、  
電気——マクスウェル

次の時代      アインシュタイン、L, M, Tの変容および原子。

プランク、プロイ

放射線——相似による表象の枯竭。

(C, XV, 212 / C, 2, 881)

物理学の歴史的発展の段階を示したこの断章によれば、19世紀のとりわけ後半は、

<sup>5</sup> Paul Valéry, *Cahiers*, édition établie, présentée et annotée par Judith Robinson-Valéry, « Bibliothèque de la Pléiade », t. 2, Gallimard, 1974, p. 848. 以下「C, 2, 848」のように略記する。

<sup>6</sup> このほか、「光の歴史——300年 刺激剤集成」というタイトルを持つ断章では、デカルトの屈折光学からプロイの光子まで、物理学上の重要な発見や理論が箇条書きにされた表が記されている (C, XV, 618 / C, 2, 884-885)。

それ以前のニュートン力学からカルノーの熱力学やマクスウェルの電磁気学への「推移」の時代に相当し、それに続く 20 世紀初頭は、アインシュタインやプランクやプロイによる「L〔長さ〕、M〔運動〕、T〔時間〕の変容および原子」の時代、そして、「放射線」と「相似による表象の枯渇」の時代に相当する。ヴァレリー自身によるこの時代区分に従うならば、1895 年の「序説」初版の背景をなすエピステーメーは、カルノーの熱力学やマクスウェルの電磁気学といった 19 世紀後半の「推移」の段階に相当するのに対して、1919 年の「序説」第二版や 1930 年執筆の「序説」第三版の背景をなすエピステーメーは、アインシュタイン、プランク、プロイによる「変容」の段階に相当すると言えるだろう。ヴァレリーのいう「推移」から「変容」への転回は、トマス・クーンのいう「古典物理学の世界像から量子力学的世界像へのパラダイム転換<sup>7</sup>」に相当すると言ってもよいだろう。

1919 年と 1930 年の二度の加筆においてヴァレリーは 1895 年の若書きのテキストを全体において尊重しつつも、表現の改変や削除や欄外注記を通して、こうした物理学的世界像の「パラダイム転換」に敏感に反応しているはずである。過去のテキストに加筆せざるをえない動機として、若書きを冷静に対象化できる長い冷却期間を経た成熟期の人間としての自己批判的な意識が働いたことは間違いあるまい。しかし、そうした内的動機を外から促す客観的な契機として、物理学のエピステーメーの根本的な転回という事態が強く作用したこともまた確実である。実際、1930 年の欄外注の中には、科学的な認識の進展をめぐる記述が少なくない。本稿が「序説」のケルヴィン卿をめぐる一節の変化に着目するのは、そうした時代の科学の進展に対するヴァレリーの反応の軌跡が、エディションからエディションへとこの一節がたどる変化のうちに集中的かつ特権的に現れているからである。以下、1919 年と 1930 年の加筆の様子をそれぞれ具体的に検討していきたい。

### ケルヴィン卿への称賛のトーンダウン

まず、1919 年の第一の加筆において何が起きたかを振り返っておこう。1895 年の初出においてヴァレリーは、物理現象の物質的モデル化、上に引いた断章の表現になれば「相似による表象」の天才としてケルヴィン卿を称賛していた。ケルヴィン卿の著書

<sup>7</sup> 野家啓一『パラダイムとは何か』、講談社学術文庫、2008 年、92 頁を参照。

『科学講演と談話』（1893年）を熱心に読んでいたヴァレリーは、「序説」を発表する前年の1894年6月、ロンドンに滞在し、著名な法学教授フレデリック卿の家に招かれた際、客人の一人として来ていたケルヴィン卿に紹介されて親しく談話する機会に恵まれた。「序説」執筆当時、ヴァレリーがケルヴィン卿に抱いていた敬愛の念の強さは想像にたたくない。しかし、1919年の「序説」再版時、ヴァレリーは、一部テキストに表現の変更や削除を施すことによって、かつての称賛のトーンを明らかに低減している。以下、ケルヴィン卿の名前が現れる箇所を1895年の初出テキストに基づいて示してみる。なお、下線を引いた部分はいずれも1919年版で訂正や削除が施される。第二の下線部は「ケルヴィン卿においては」という簡潔な表現に縮小され、第三の下線部についてはすべて削除される。

エネルギーの様態を形象化する作業にますます要求される正確さ、諸々の表象のうちに導き入れられた連続性（この場合、一つの動力的な理論）が、論理的にも心理的にも巨大な利点をもった仮説的構築物を出現させたのである。私はここでケルヴィン卿の名前を挙げないわけにはいかない。（読者諸賢には本論の目的と主題と無関係な余談などと思わないでいただきたい。〔レオナルドの仕事において〕《モナリザ》が水門や機械〔に対する彼の関心〕と密接に結びついているのと同様、ここに述べられていることもレオナルドに深く関係しているのである）。この科学者においては、非常に微妙な自然の作用についても、一つの心理的連関を追求して、物質的な形として具現化できるところまでつきつめて表現しようとする欲求が非常に強いために、どのような説明も、力学的モデルに到達しなければならないものと思われていた。彼は広範な理論的知識と併せて、言わば伝説的と言ってよいような実験の才能を獲得したのである。このような精神は、ボスコヴィッチや今世紀〔19世紀〕初頭の物理学者たちが考えていたような不活性で局所的な、粗雑で時代遅れの原子モデルを、エーテルの網目に捕捉された、かなり複雑なメカニズムで置き換える。このメカニズムはその後改良を加えられて、様々な条件を満たすことのできる構築物に成長した。こうした精神の持ち主は結晶の構造から石や鉄の構造へと移っていくことに何の痛痒も感じない。彼が〔峡谷などに架けられた〕陸橋や〔建屋の〕梁桁・接合材の形に見出すのは、石膏や石英が圧縮や劈開に抵抗するためにもっている対称構造、あるいは別の方面のことだが、光の軌線に対して見せる対称

構造である。(CE, I, 1195-1196, 1825 下線は引用者)

「今世紀」とあるのは19世紀のことである。「序説」初版が書かれた19世紀末の時点で、物質をめぐる物理学的世界観は、ファラデーからマクスウェル、ケルヴィン卿へと続く英国学派物理学の長足の進歩、とりわけ電磁気学の進展によって、「ボスコヴィッチや今世紀初頭の物理学者たち」のそれから、既に大きな変貌を遂げていた。この1895年のテキストの一節で特に注目されるのは、ケルヴィン卿における「力学的モデル」の構築能力に対する若いヴァレリーの熱狂的な支持である。「序説」の企図がレオナルド的な精神の言わば「力学的モデル」の構築をめざすことにあった<sup>8</sup>以上、ヴァレリーに方法的な示唆を与えた最重要人物こそケルヴィン卿に他ならなかった。しかしその熱狂は、1919年の「序説」第二版では、加筆作業を通してかなりの程度冷却していることが明らかである。

ちなみに、こうしたケルヴィン卿を礼賛する調子の後退は、「連続性」というキーワードの後退と並行している。実際、第一の下線部は、1919年の加筆で「見ることへの意志、そして言わば動力的偏執とでも呼べるもの」という表現に改められ、「連続性」という語は排除されている。また、ヴァレリーは1895年のテキストで、世界に不規則にちりばめられた「規則的な組合せ」を論じた一節において、「それらの規則的な組合せは連続性を表している」と書いていたが、1919年の第二版では、この「連続性」という単語に脚注を設け、次のような留保を記している。

この語のここでの意味は数学者たちが用いる意味ではない。ある区間の中に可算の無限値と非可算の無限値を挿入するという意味ではない。ここで問題になっているのは、法則を考えさせる対象、眼に訴えてくる法則といった程度の素朴な直観にすぎない。連続とは〔可算できるような〕相似形の存在ないしはその可能性もたらす現象であり、それなりに意味がある。(CE, I, 1173)

1895年当時のヴァレリーにとって「連続性」という語は、「対称性」や「共通の尺度」と並んで、自らの思考が常にそこへと回帰していく重要なキーワードだった。しかし

<sup>8</sup> 「ある頭脳、ある個人の力学的モデル（レオナルドのために）」(Cahiers 1894-1914, I, Gallimard, 1987, p. 393)



1919年になると、「連続性」への距離感は明白である。1895年の「連続性」は数学的な厳密な意味で用いた語ではなく、「法則を考えさせる対象，眼に訴えてくる法則といった素朴な直観にすぎない」と、かなり突き放した言い方になっている。さらに、1895年の初版では、この同じ段落の最後に、「いわゆる対称性というものもまた連続性の同義語である<sup>9</sup>」という一文が記されていたが、1919年の第二版ではそっくり削除されてしまう。こうした眼に訴えてくる「連続性」や眼に見える「力学的モデル」への熱狂が冷めていく方向性は、1930年の欄外注に至ると、さらに決定的な絶望の見通しへと先鋭化する。

我々は現在——1930年——これら〔複雑新奇な事象を連続的な値に翻訳する作業〕の困難が差し迫った地点に立っている。現在のこの状態を私は〔18〕94年<sup>10</sup>に極めて粗雑な仕方では表現したのだ。我々は形による——さらには知性による——説明を一切断念しなければならないところまで来ている。(Ibid.)

「形による説明」を断念せざるをえないとは、「力学的モデル」の提示や「連続性」の追求を断念せざるをえないという意味に他ならない。かつてあれほど熱狂したケルヴィン卿の方法論が、今や効力を失い、諸現象のモデル化ができない時代へと至ってしまった、とヴァレリーは慨嘆しているのである。時代の科学に敏感なヴァレリーの一種の諦念すら感じとれるこの1930年の欄外注執筆の舞台裏を、ある興味深い資料に基づいて、もう少し詳細にたどってみたい。

### 「イメージの終焉」

1930年、ヴァレリーは、1919年版のテキスト、すなわち「注記と余談」および「序説」、以上二つのテキストに、1929年の「レオナルドと哲学者たち」を加えたレオナルド論三篇をひとつの書物にまとめ、そのすべてに欄外注を付すこととした。この新版『ポール・ヴァレリーのレオナルド・ダ・ヴィンチについてのさまざまな試論、著者によるコ

<sup>9</sup> CE, I, 1823.

<sup>10</sup> 「序説」の執筆時期は1894年の12月から翌1895年の3月頃であり、『新評論』誌上に掲載されたのは1895年8月15日号であるから、ここはむしろ「1895年」となるのが正しいが、1894年は「序説」や「テスト氏」を構想し、さらに「カイエ」を始めた記念すべき年でもあり、ヴァレリーはしばしば1894年を特権的な年号として扱うことがある。

メントと注つき<sup>11</sup>』は、1931年9月9日に印刷が完了し、サジッテール書店から刊行された。印刷完了が遅れた経緯があり、欄外注の実際の執筆は1930年である。サジッテール書店の店主はシモン・クラという人物で、サジッテール書店と名乗る以前はクラ書店であった。この版は、本文を活字で組み、欄外注をヴァレリーの手書きテキストの写真版で組んだ、どちらかというとな愛書家向けの工夫が感じられるエディションである。このように、普及版と呼ぶには特殊な版であり、本稿では以下、この1931年刊行の版を「クラ版」と呼ぶことにする。現代のヴァレリー研究者を含めて、「序説」を読む場合の定本となっているプレイヤード版のテキストは、三つのテキストの順序をクロノロジーに従って改めている点を除けば、1938年刊行の「著作集」版を底本としている。しかし、この1938年の「著作集」版は、欄外注の手書きの写真版を活字化している点とごくわずかなヴァリエーションがある点を除けば、1931年のクラ版を底本としている。つまり、我々が慣れ親しんでいる1957年のプレイヤード版のレオナルド論のテキストは、遡れば、この1931年刊行のクラ版に行き着くのである。

「序説」のケルヴィン卿の一節は、クラ版（したがってクラ版以降のすべての版）では次の通りになっている。本文テキストは1919年版のテキストと同一である。その中ほど、「メカニスム un mécanisme」という単語の右側の欄外余白に、三行に及ぶ簡素な注が、手書きで記されている（図1）。

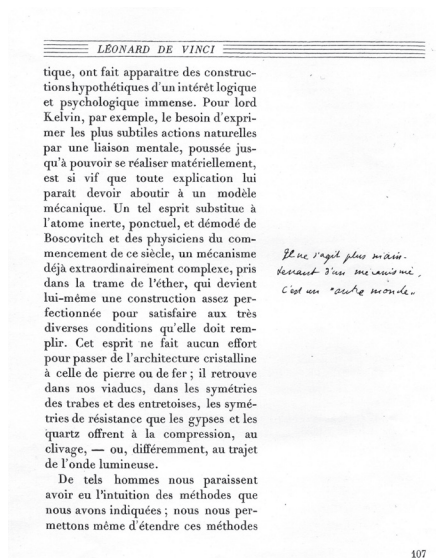


図1 クラ版 107頁

Il ne s'agit plus main-  
tenant d'un mécanisme.  
C'est un « autre monde »

「今日ではメカニスムはもはや問題ではない。問題となっているのは《別の世界》である」と読める。この「メカニスム」は「力学的モデル」とほぼ同じ意味価値を担って用いられるキーワードであるが、1930年のヴァレリーは、この欄外注

<sup>11</sup> Paul Valéry, *Les divers essais sur Léonard de Vinci de Paul Valéry commentés et annotés par lui-même*, Éditions du Sagittaire, 1931.



の場で、きわめて簡潔に、それは「もはや問題ではない」と記している。「メカニズム」が問題でないとすれば、「力学的モデル」ももはや問題でないということになるだろう。「力学的モデル」がもはや問題ではないということになれば、1895年のヴァレリーの試みを支えた「方法」自体の有効性が問われることにもなりかねない。1895年のヴァレリーがあれほど熱狂し、自らの想像力の冒険の有力な水先案内人として絶大な信頼を捧げたケルヴィン卿の「メカニズム＝力学的モデル」が、1930年の今、その有効性への信頼を失い、無効性の宣告を受けている。短い欄外注記ではあるが、その持つ意味は重大である。

クロノロジーに従って加筆の跡をたどってみると、1895年の「メカニズム＝力学的モデル」礼賛の楽観的ともいえる熱狂の温度は、四半世紀を経た1919年において既にかんりの程度冷却し、1930年になるとそれは「もはや問題ではない」と切り捨てられるまでに至っている。クラ版のこの頁の余白の空虚は、時代の科学に常に有益な示唆を受け続けて来たはずのヴァレリーにとって、青年時代の熱狂の対象となったひとつの物理学的世界認識が、時間の経過につれて新たな「別の世界」の認識に取って代わられていくという物理学的エピステーメーの急速な転回劇への無言の感慨に充満しているように思われる。

ところで、1931年のクラ版のためのゲラ刷りのひとつと考えられる草稿資料の或る頁を眺めると、決定稿の欄外余白においては眼に見えないこうした無言の感慨が、まさしく眼に見える言葉の群れとなって文字通り充満していることがわかる。フランス国立図書館所蔵の草稿資料「Paul Valéry, « Léonard de Vinci II<sup>12</sup> », BNF ms, naf 19055

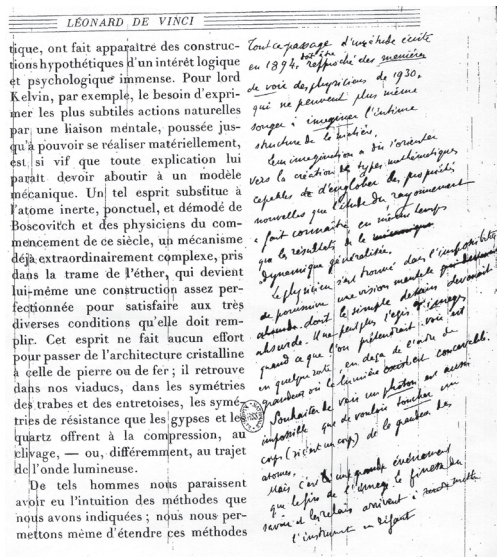


図 2 ゲラ刷り草稿<sup>12</sup> 58<sup>v</sup>

<sup>12</sup> この資料体は全体で279の紙葉から成り、最初の87紙葉がクラ版のゲラ刷りであり、残りはヴァレリーによるレオナルド関連の講演やラジオ放送の草稿、様々なメモ等となっている。クラ版のうち「レオナルドと哲学者たち」のゲラ刷りは収録されていない。「序説」のゲラ刷りは63紙葉収録されているが一部が欠けている。また手書きの注は決定稿の状態からは非常に遠い。これに対して、「注記と余談」のゲラ刷りは一部注記がなされていない部分があるものの、注記された部分については決定稿の状態

(MF428), f° 58 v°」がそれである（図 2）。

このゲラ刷り草稿は、最終的な頁番号が打たれる以前の校正刷りであり、本文右側の欄外余白には、ヴァレリーの手書きによる注がびっしりと書き込まれている。以下、手書きの部分を活字に起こしたうえで、拙訳を示す。

Tout ce passage d'une étude écrite en 1894, doit être rapproché des manières de voir des physiciens de 1930, qui ne peuvent plus même songer à imaginer l'intime structure de la matière. / Leur imagination a dû s'orienter vers la création des types mathématiques capables d'englober les propriétés nouvelles que l'étude du rayonnement a fait connaître, en même temps que les résultats de la mécanique dynamique généralisée. / Le physicien s'est trouvé dans l'impossibilité de poursuivre une vision mentale ~~qui devenait absurde~~ dont le simple dessein devenait absurde. Il ne peut plus s'agir d'images quand ce que l'on prétendrait voir est en quelque sorte, en deçà de l'ordre du grandeur où la lumière existe est concevable. / Souhaiter de voir un photon est aussi impossible que de vouloir toucher un corps (si c'est un corps) de la grandeur des atomes. / Mais c'est un grand événement que la fin de l'image. La finesse du savoir et les relais arrivent à rendre mettre l'instrument en défaut.

1894年に書かれた習作のこの一節全体は、1930年の物理学者たちの物の見方と比べてしかるべきだ。彼らは物質の内部構造を想像することなどもはや思いもよらない。

彼らの想像力は、放射線〔太陽放射線や電磁放射線など〕の研究が一般力学の結果と同時に知らしめた新たな諸特性を包括しうる数学的類型の創出へと向かわなければならなかった。

物理学者は、その単なる構想すら馬鹿げたものとなった心的ヴィジョンを追求することなどできないことに気づいたのである。人ができれば見てみたいと願うものが、光の存在を考えることのできる大きさのある秩序の言わば手前にある時、もはやイメージは問題になりえない。

光子を見てみたいと望むことは、原子の大きさの物体（仮にそれが物体であると

---

ときわめて近い記述になっている。

して)に触れてみたいと望むのと同じくらい不可能である。

それにしても、イメージの終焉とは大事件である。知の繊細さともろもろの中継器はついに道具を用いる手段を誤謬とするに至ったのである。

決定稿として刊行されたクラ版の該当頁(107頁)と比べてみると、充満から空虚への変化は一目瞭然である。フランス国立図書館司書による説明書きにもある通り、この「序説」のゲラ刷り欄外注草稿は「決定稿の状態からは非常に遠い」ものとなっている。「序説」欄外注の数は最終的に全部で59ヶ所となるが、その規模に比べると、このゲラ刷りの資料体には欠落が多く、表現もかなり異なっている点から、この資料体の地位については「ゲラ刷り草稿」と呼ぶのが正しいだろう。

ゲラ刷り草稿と決定稿との差異を顕著に示す典型的な例が、この f° 58 v° である。ヴァレリーによる手書きの原文で28行にわたる書き込みが、決定稿でわずか3行に凝縮された背景については、執筆が進む過程で他の欄外注に分散させた可能性が考えられる。決定稿の全59ヶ所の欄外注に仮に番号を振った場合、たとえば39番、52番といった箇所がそうである。これらの欄外注はゲラ刷り欄外注草稿には見られない。まず、決定稿欄外注39番。

Ceci est curieusement confirmé, 36 ans après, aujourd'hui, 1930.

La physique théorique la plus hardie et la plus profonde, – contrainte de renoncer aux *images*, à la similitude visuelle et motrice – n'a plus, pour embrasser son immense domaine, unifier les lois et les rendre indépendantes du lieu, de l'époque et du mouvement de l'observateur, d'autre guide que la *symétrie* des formules.

これは、この試論から三十六年後の1930年の今日、興味深くも確認されていることだ。

最も大胆で最も深遠な理論物理学は——イメージや視覚的・運動的な類似を放棄せざるをえず——その巨大な領域を包括し、諸々の法則を統一し、それらを〔それらが見出された〕場所や時代、観察者の運動から独立させるためには、もはや、〔物理学の〕公式の対称性以外にしかるべき案内役はもっていないのである。(クラ版79-80頁; *CE*, I, 1175)

ゲラ刷り草稿にこれと対応する箇所は見当たらないが、記述内容は f° 58 v° に見られる「心的ヴィジョンの追求の不可能性」や「もはやイメージは問題になりえない」「イメージの終焉」といった表現内容と重なっていることは明らかである。ヴァレリーがこの決定稿欄外注 39 番でとりわけ「イメー<sup>レ</sup>ジ<sup>レ</sup>」という語をイタリック体で強調している点にも注意すべきだろう。続いて、決定稿欄外注 52 番。

Ce ne sont plus aujourd'hui des *édifices* que découvrir la physique dans la matière.  
Elle finit par y trouver de *l'indescriptible par essence* – et de *l'imprévu* ! 1930

今日、物質のうちに物理学が見出すものは、もはや建築物ではない。物理学が見出したのは本質的に描写できないもの——予見できないものであった！ 1930 年。  
(クラ版 98 頁；*CE*, I, 1188-1189)

ゲラ刷り草稿にこれと対応する箇所はやはり見当たらないが、記述内容は f° 58 v° と類似している。たとえば、f° 58 v° の「物質の内部構造」はここでは「建築物」という表現に移行していると考えられるだろう。ざっと比較して明らかのように、決定稿欄外注 39 番と 52 番はいずれも視覚的イメージによる物理現象の表象の不可能性について記している点、またいずれも「1930 年」という年代に明確に言及している点で f° 58 v° の記述内容と重なっている。おそらくヴァレリーはゲラ刷り草稿 f° 58 v° の欄外注で一気に記した内容を、決定稿に至る過程で、たとえばこの 39 番や 52 番の注記に表現を改めつつ分散させたと考えてほぼ間違いあるまい。

決定稿でその他の欄外注に記述が分散し、最終的に簡素な 3 行だけの記述に落ち着くことになるこの f° 58 v° の 28 行の欄外注草稿は、もちろん、結局採用されずに終わった一草稿に過ぎず、それにどれほどの意味があるのかという見方もできるかもしれない。しかし、既に 1919 年の段階で加筆せざるをえない問題を孕んでいたこのケルヴィン卿をめぐる箇所が、1931 年のクラ版に向けた欄外注記を準備する段階でも再びヴァレリーの加筆を誘発せざるをえなかったということ、しかもその際、ヴァレリーはこの 28 行を一気に記して、その最後に「イメージの終焉とは大事件である」という明快な一文を記さざるをえなかったという事実は無視できない。この一文は物理学的エピステーメーの転回と詩人ヴァレリーとの関係を考えるうえで非常に示唆に富むと思われるからである。

ジュディット＝ロビンソン編集によるテーマ別抄訳版『カイエ』の「科学」の項目を読むと、とりわけ1920年代から1930年代にかけて、ヴァレリーがノーベル賞クラスの科学者たちと親しく交わっていることがわかる。ゲラ刷り草稿p 58 v°の欄外注冒頭にある「1930年の物理学者たちの物の見方」は、実際にヴァレリーが友人の科学者たちからじかに耳にしたものと考えられる。現代物理学にあっては「数学的類型の創出」が主要な関心事となり、「心的ヴィジョン」や「イメージ」はもはや問題になりえないということ、「想像する」ということがもはや考えられないことになっているという点については、「カイエ」のいくつかの断章がこれと関連するだろう。

#### 人間と物理学——

たとえ錯雑したイメージであるにせよ、イメージにたよって物質世界を表象することはもはやできなくなっている。連続体も不連続体も満足は与えない。そういうイメージとは別のものを探し、おそらく、正確を目ざして、事物を破壊されることのない素朴な根底を持つ言語——我々の諸感覚——に翻訳するところまで立ち戻らなければならない。しかし法則をどうしたものか。(1920年, C, VII, 509)

想像的なもの、想像可能なものはもはや目標ではない。眼に見えるものの代わりに、想像的な行為を可能にする別のヴィジョンを立てようと試みられることももはやないだろう——（それがまさしく力学理論だ）。そして測定、測定の組合せが行われ、そして我々は何物かを予見できるようになるだろう。予見するのであって、もはや見るのではない。(1922年, C, VIII, 548)

1930年3月8日

〔グザヴィエ・〕レオンの家でレイ・ド・ブロイ、ランジュヴァンなどと話す。私はブロイに声をかけて、彼の言う電子の素朴なイメージとして彼がその眼で見るのはどういうものか尋ねた。何も見えないという。ランジュヴァンに電荷としてその眼で見えるものについて。彼は色々単語を口にした。(C, XIV, 325)

本稿で先に引用した1931年の「カイエ」の断章の末尾に記されていた「相似による表象の枯渇」、そして1930年の「序説」欄外注の「我々は形による——さらには知性に

よる——説明を一切断念しなければならないところまで来ている」という記述<sup>13</sup>もまた、これら一連の断章のテーマと同系列である。「序説」全篇にわたって、「見ること」のうちに想像力の基本を見出していたヴァレリーにとって、ケルヴィン卿の物質的想像力は揺るぎのないモデルだったはずだが、そうした想像力が通用しなくなっている二十五年後、三十五年後の現代物理学の状況に、ヴァレリーは根本的な不安を感じているように思われる。物理現象の物質的モデルによる表象機能やアナロジー能力の顕揚を主題とするケルヴィン卿をめぐる「序説」の一節は、そのまま、詩人ヴァレリーの詩学の原理を語る部分でもあったとすれば、「見ること」がもはや問題にならない現代物理学の「別の世界」は大きな脅威であり、「イメージの終焉」はヴァレリー自身にとってまさしく「大事件」であったにちがいない。

しかし、新しい物理学の世界観がイメージを拒絶する方向に進んだとしても、詩人ヴァレリーは、あくまでも「我々の諸感覚」に基づくイメージの側に、「見ること」の側に自らの存在理由を置き続けるだろう。言うまでもなく、言語芸術家としてのヴァレリーの課題は、言語によるイメージの喚起であり、複雑な精神現象や現実世界を比喻や類推によって形象化しようとする表象の探求に他ならない。詩人ヴァレリーにとって「イメージの終焉」はあってはならない事柄なのである。現代物理学の反イメージ的な転回に居心地の悪さを感じるイメージ主義者ヴァレリーは、結局のところ、19世紀後半のカルノーやマクスウェルやケルヴィン卿の言わば表象主義的な世界観に寄り添い続けざるをえないだろう。二度の加筆によってとりあえず現代の物理学的世界像に呼応して一種の自己否定的なアップグレードの身振りを演じたとしても、想像力を最重要視するヴァレリーの根本的な部分が変わらず、またそもそも変えることはできなかったにちがいない。実際、晩年の「カイエ」には、「序説」においてケルヴィン卿やマクスウェルと並びレオナルド的な想像力の持ち主として顕揚されているファラデーの「力線」への強い愛着が顔をのぞかせている。

<sup>13</sup> クラ版 79 頁〔CE, I, 1174〕に見られるこの欄外注は、ゲラ刷り草稿にも既にほぼ同じ表現で記されている。「Nous voici arrivés 1930 au point où ces difficultés deviennent pressantes. J'ai exprimé bien grossièrement et maladroitement en 94, l'état actuel. Nous en sommes à désespérer de toute explication non seulement figurée, mais même simplement intelligible.» (Paul Valéry, « Léonard de Vinci II », BNF ms, f° 32 v°)



イメージ

親愛なるファラデー！

心像〔image mentale〕の勝利——物理学的イメージの心的領域への転置。

ここで、視覚的には不活性な形象に過ぎないイメージが《力》を帯びる。目には力は見えない。心的な時間の領域で作用するのは我々の駆動力の励起である。[……]

(1942年, C, XXV, 434)

「イメージの終焉」を迎えた物理学的世界観と、あくまでも「イメージ」の操作を旨とする詩人の存在理由の間の葛藤……。1930年の欄外注草稿は、物理学的エピステーメーの根本的な転回を前にした詩人ヴァレリー自身の、切実な狼狽の記録たりえている。

## La fin de l'image ?

Tsutomu IMAI

Paul Valéry a remanié deux fois, en 1919 et en 1930, son texte de jeunesse publié en 1895, *Introduction à la méthode de Léonard de Vinci*. Nous avons observé, dans cette présente étude, les changements d'un passage important sur Lord Kelvin qui se trouve vers la fin du texte. Le Valéry de 1919 a considérablement atténué le ton de son enthousiasme pour Lord Kelvin. En 1930 dans une note en marge de ce passage, il exprime une amère constatation sur l'état actuel de la physique où il ne s'agit plus d'images. Ces changements de ton correspondraient au développement de la science physique, au changement de la conception du monde matériel. À l'époque où Valéry écrivait l'*Introduction* il gardait une ferme confiance en la possibilité de traduire toute chose en une commune mesure. Mais, 25 ans ou 35 ans après, la vision dominante dans la science physique s'est complètement transformée, passant de la continuité à la discontinuité, même à la fin de l'image. La construction d'un modèle mécanique est enfin devenue impossible. Mais, malgré cela, Valéry ne renonce pas à sa foi en possibilité de voir, puisqu'elle constitue la base de sa poétique, de sa théorie de l'imagination.